
司馬懿の憂鬱

言霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

司馬懿の憂鬱

【Nコード】

N3483R

【作者名】

言霊

【あらすじ】

ナルシスト・自己中・外道の女主人公 司馬懿のお話。
原作キャラ普通に死ぬので注意してください。

ひとりがたり（前書き）

とりあえずナルシスト主人公書いてみたかった
反省はしてない！

ひとりがたり

なんてぼろい商売なのだろうか

ただ座っているだけでお金が使い切れないほど入る

恋姫なんてふざけた世界に生まれて唯一得した事はこれだろう。

好きなだけ土地を買って隷属農民を働かせることができる。

もちろん私の所にいるのは重税によって土地を売らざるを得なかった人や盗賊によって土地を追われたものである。

重税に苦しみ盗賊に全て奪われた人に世界一の美少女である私が助けを与え、彼らは私が持つ土地で一生働きその恩を返そうとする。

ギブアンドテイクとはこのことだろう。労働の代わりに私の作った楽園で暮らす事が出来るのだ。むしろ感謝されるかもしれない。英雄とか呼ばれてる変態やピンク、戦闘狂の下では20年しか生きる事ができない者達を救ってあげているのだから。

この方法を考えた者には感謝しなくてはならないだろう。軍を引き連れてお願いをして食料を全て寄付してもらいついて行く事を許すなんてなかなか考え付く事ではない。あくまで自主的について行かせるのだ。

食料を寄付した所は飢えるしかないのについて行く。そして次の場所でも…とそんな事を続ければ何十万という者達が自分の意志でお願いをしたもののもとに集まる。徳の行軍つてやつだ。まあ、私の場合はたまたま盗賊に襲われ、食料を全て失った村にたまたま私の部下が立ち寄り身一つでも受け入れてそこにいく事を了承す

れば今すぐにも食料をくれる私を紹介するというものだが

民を収奪し、己の栄達のみを願う風潮が、当然の如くに横行する時代で私のようなものに出会えたことを神に深く感謝するでしょう。むしろ私が神なのではないだろうか？

馬が一頭3億なんて時代に1万の騎兵を作ろうとしたら3兆…

慈悲深い私が民からそんなお金をむしり取る事が出来るはずもなく、そんな聖女を思わせる私のもとには人が集まる。そして武器を持ち私を守ろうとする。

なぜ私が武器を持ち戦わねばならないのか？

私の両親は頭が沸いていたとしか思えない

軍を司るから司馬とか司馬とは軍事の最高司令官などとほざいていたが、そんな事はどうかの脳筋に任せておけばいいのだ。私のような存在がやる事ではない。

まあ、司馬家ということで楽はできたので許してやってもいいだろう。

最近変態が仕えろとかうるさいが気にするほどではないか。

あれも両親と一緒に頭が沸いているに違いない。

「変態は神すら殺す」と言っし

かわらないのが一番だ

あら、いいにおい。おやつができたのかな？
このくだらない世界での数少ない楽しみ

「朱里、今日のおやつはなにかしら？」

ひとりがたり（後書き）

やっぱり反省してる！

はじめての虎狩り（前書き）

原作キャラ死にます。

そんなのダメって方は戻ってください

はじめての虎狩り

〓武昌孫堅陣〓

「周瑜と言ったか？」

「姓を周、名を瑜、字を公瑾、真名は冥琳と申します。孫堅様」

「堅苦しいな、紅花と呼べ。黄射との戦い見事だったぞ。黄祖の野郎も自分の娘がやられて顔を青くしてるだろうな。お前を軍師として認める。異存はねえだろ龍華！」

「娘の友人と言うだけで大切な戦いの指揮を任せることに反対していたのであって、人事についての反論などありません。」

「わかった。わかった。」

「程普殿これからよろしくお願いします。」

「ああ、よろしく。」

「じゃあ、冥琳。黄祖との戦いでなんか策があるそうだが聞こうか。」

「え、冥琳そういう面白そうな事は私にまず言ってよ。ぶーぶー」

「雪蓮……」

「この馬鹿は気にせず続ける」

「は、相手は劉表軍の援軍5千を加えた5万5千

に対し、こちらは4万。数ではやや劣るものの将の質ではこちらが上、ほぼ互角と言っていていいでしょう。しかし、砂丘地帯に塹壕を掘らせ塹壕戦に持ち込もうとしているようです。長期戦になれば劉表軍からさらなる援軍も来ますし、こちらの補給も途切れます。それを狙ったものかと思います。ですが塹壕を堀ったということは黄祖の周囲を自由に動けることを意味します。敵の側背に廻り込めばそれだけで勝てるでしょう。」

「ん、だが相手もバカじゃねえだろ。どうやって廻り込むんだ。」

「紅花様。話は最後まで聞いてください。煙です。風上から、煙幕を張る。そうだろう?」

「っ…さすがです。程普殿。現在北西の風が吹いておりますが東南の風の風が来る日があるそうです。その日に枯れ草を使い煙幕を張ります。黄祖もいきなり風の向きが変わるとは思わないでしょう。」

「じゃあそれで行くか!うまくいけば黄祖軍の2、3万は吸収できるかもしれないな。」

「沙羨黄祖陣」

「あの田舎者め。」

そう呟いている馬鹿に向けて剣を振るう。司馬家というだけで無理やりさせられた剣術の訓練なのだがこんな時には役に立つ。まった

く感謝してないけど。

「私の話を聞いてくれるかしら？」

首に剣を押し当て、そのまま話を続ける。馬鹿の返事などいらぬ。

「孫堅軍は煙幕を張って廻り込もうとしているわよ。このままだとあなたは死ぬでしょうね。死にたくなければこの子の指示に従いなさい。いいわね？」

哀れになるくらい震えて首を振っている。あら、すこし切れて剣が汚れてしまった。手入れが大変。私はしないけど

「あ、あの終様。こ、これはどういう事ですか？」

ああ、説明するのを忘れていた。

「朱里。劉表の政をどう思う？」

「す、素晴らしいと思いますしゅ。民には笑顔があふれ、飢えと病気に苦しむ時代に在って安心して暮らせる。し、しかし劉表さんは乱世には不向きな方。戦う事を嫌い、民の為にのみお金を使う。それでは国を守れないと思います。」

「それに対して孫堅は戦に莫大な金を投じて勝利している。今は袁術を騙して兵糧を手に入れたり自分に付かない豪族達を殺して兵や金を手にしているが、それで天下を取ったとして戦いは収まるのか

しら？そしてそんなものを王とし周りは認めるのか？考えてみなさい。」

まあ、孫堅が実際に殺したのはそんなに多くはない。たしかに私兵団を使った嫌がらせ行為で結婚相手

を手にし、朝廷を馬鹿にするように軍を動かしたり、州勅使殺すなど大暴れしてたから敵も多いだろう。しかし、自分に従わないものを殺していたらきりがないし、何人かを見せしめにして逆らえばどうなるかを示せばいい。なんの義理もない郡に大量の食糧に道の整備の要求に兵の貸し出しなんて無茶な条件をして、しなかった郡の長の所に行き話し合いと称して殺したのはそういった意図があったのだろう。それ以降他の郡は孫堅の要求をのむようになったらしいし

「そ、それは…」

「そう、どちらが民の為になるかを考えなさい。たしかに劉表は天下を狙うほどの器ではないけれど、民は笑っている。孫堅が荊州を取れば荊州を拠点として袁術と戦う事になるでしょうね。孫堅と袁術は一時的に手を組んでるだけで仲はよくない。兵糧を与え孫堅軍を動かしたのも荊州を欲しがっただけ、劉表との戦いで消耗した孫堅から奪い取ろうとするでしょうね。そうすれば荊州は戦場となり多くの血が流れる笑っている民を守りたくない？」

「ま、守りたいです。」

「じゃあ、守らないとね。このままだと負けてしまうし。黄祖とかいったかしらあなた？」

「は、はい。そうです。」

「この子の言う通りに戦いなさい。あとこの子の事について詮索しないこと。」

「はい…。」

「朱里。民の為に戦えるかしら？」

「はい！」

「沙羨黄祖軍 朱里」

「相手の斥候は東南の風が吹く日を特定するために出払っています。こちらが動かないと油断している証拠でしょう。その隙を突きます。」

周公瑾は偶然風の向きが変わると聞いた。

偶然その地域に住んでいた者が自分の軍にいた。

風が変わる日が偶然孫堅軍の行軍速度ぎりぎりだった。

彼女ほどの軍師なら畏かとも思つかもしれなかった。

しかし成功すれば自軍が被害なく一方的に勝利できるという甘い現実と黄祖の娘に一方的に勝利したことによる相手への侮りが混ざり合い。その事に気づけない。いや気付かせない。

さらに偶然指揮をする機会に恵まれ、それを成功して見せたことで、敬愛する英雄に認められ、親友の隣りに立つ事が出来たことによる喜び。これで詰みだ。

一体何処まで終様の思い通りに進んでいるのだろう。

「この世に偶然なんてないあるのは必然だけ……」

そうつぶやいた終様の顔は恐ろしくそして美しかった。

天才、秀才が全国から集まった水鏡女学院の主席で負けたことが無く、自分が一番だと思っていた。そんな幻想を打ち砕いてしまったのが終様。

あなたは勘違いをしている。

私はもう民のためになどとは思っていない。

あなたに追い付きたい。そしていつか同じ景色を見てみたい。ただそれだけの思いでここにいる。

今の私ではあなたのおもちや程度の価値しかないだろう
でもいつか必ず…

Ⅱ 沙羨孫堅軍 孫堅 Ⅱ

「なんだこれは？」

目の前では黄祖の軍勢に一方的に殺されている兵。東南の風が来る日に合わせて進軍し、煙幕を張った。そして塹壕にこもっていた黄祖軍に向かって矢を打ち込んだ。そのあとは簡単な殲滅戦になるはずだった。

そのはずがなぜか俺の軍の横から……せっかく掘った塹壕を捨てたのか？こちらの策が読まれたのか？

それとも裏切り？

「堅殿！！私が切り開きます！！」

「韓当！」

韓当の精兵が相手に向かって突撃していくそして…あ、あれは劉表の長矛部隊か！5千と数は少ないが無敵と称される大陸最強の部隊。この策、この配置といい、黄祖のものではない。誰だ？俺はだれを相手にしているんだ

〓 沙羨孫堅軍 周瑜 〓

「ありえない。」

なんだあの配置は！

あと1日、いや半日攻めるのが遅ければこちらの勝ちになっていた。あきらかにこの時間にこちらが煙幕を張ると分かっていたような露骨な配置

こちらの動きが漏れていた？いやそんな事今はどうでもいいことを切り抜けるためには…

「裏切りだー！！！！」

誰かがそう叫んだ瞬間白い布に墨を落としたように急速に自陣に広まっていく。

こんなに一方的にやられているのは誰かが裏切ったせいだと思いたい気持ちは分かる。だがそんな事を今考えたとしてもしょうがないのに

「冥琳！！！」

ああ、わかってるこのままではまずいすぐに対応しな…

「雪…蓮？」

目の前には真つ赤に染まった雪蓮。

私を庇ったのか？

「この裏切り者め！なにが周家だ。何が名門だ。」

そんな事を言っている兵。

ああそうか。この策が私の物である事は皆知っている事だ。

私の策にのみ対応された罫。

少し頭のまわるものなら考える。誰がこの策を出したか。

彼らは当主の孫文台が家柄に劣等感を持っているゆえに出生にこだわらず結果のみで出世できる孫家に付いて来ていて、周りから見れば揚州一の名家であるという威光を使って出世しているようにしか見えない私は面白い存在ではないだろうしな。機会があれば殺したかっただろう。

目の前が…暗く…なつて…き…

4時間後孫堅軍潰走。しかしこの沙羨の戦いで戦死者は3万を超え孫堅、孫策、周瑜、黄蓋、程普、呂範、将欽、韓当、朱治、徐混など有名轟く者たちが消えた。

孫堅。あなたは嫌いじゃないけど、邪魔なの。あなたが天下を取れば自分に付かない者を皆殺しにするでしょうからね。それにしても朱里があそこまでできるとは予想外だった。これからもしめそう。誰に天下を取らせようかしら、劉備のような無能にやらせた方が自由に動けるのだけど、氣候変動によって北方遊牧民が南下してくるかもしれない。それが早まったから蜀ルート100万なんて大軍が押し寄せたのだろう。晋が長江以南に逃げ込んだのもそのせいだし無能では困る。そうすると曹操のような優秀な奴にやらせた方がいいかもしれない。でもあの変態の下に仮にとはいえ付くのは嫌だなあ。何か手はないかしら

はじめての虎狩り（後書き）

劉表さん凄い部隊持ってたので使ってみた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483r/>

司馬懿の憂鬱

2011年3月10日23時56分発行